

再歩

～再建までのみち～

しもだ じゅんじ きぬこ
下田 準二 さん(74)・絹子 さん(70)

行政区：上 陳



「前向きに生きていくことが大事。あきらめてはだめ」

「この庭を眺めるのが大好きなんですよ。」

訪問したとき、下田準二さんは新しく購入した自宅の玄関で椅子に腰掛け、お気に入りの庭を眺めていました。なるほど、視線の先には梅と桜の木の奥に富士山を模したであろうと思われる見事な築山が悠然とそびえています。

震災前に妻の絹子さんと二人で住んでいた北向地区の家は、前震では大きな被害はありませんでしたが、本震では壁が「く」の字に曲がり、床板が外れ畳が立ったと言います。そして夜が明け、玄関から座敷に走っている断層を見た準二さんは、地震の威力のすさまじさに驚きました。

本震後、西原村に住む長男の家で車中泊、それから水前寺共済会館、熊本リハビリテーション病院、阿蘇熊本空港ホテルエミナスなど、いくつかの避難所を経て、10日後には、次男の勧めで着の身着のまま神戸市へと向かいました。ここでは準二さんの体の状況を勘案し、同市のあっせんで障がい者住宅として整備されている市営住宅に入居することができました。

思いがけず地元新聞社の取材を受けたことがきっかけで、テレビやラジオの取材が一週間ほど続くなど、忙しい日々を送るなか、絹子さんは神戸市の公民館活動に参加し、得意のピアノ演奏を披露するなど、積極的に地域に溶け込んでい

きました。

しかし、「どうしても益城に帰りたい」。自宅のようすも見に行かなくてはなりません。下田さん夫婦は応急仮設団地に申し込み、12月に安永仮設団地に入居しました。

「地震直後から自宅の再建を考えていました。去年11月、この家に住んでいた従兄弟が亡くなりました。四十九日の法要が終わったあと、その従兄弟が生前住んでいたこの家の購入を考え始めました。数人の方が購入したいと申し出られたようですが、従兄弟であるということや、一時期この家に住んでいたという縁もあって、今年2月中旬に購入が決まりました。これで、従兄弟の親族にも気軽にこの家を訪れてもらうことができます」(準二さん)。

購入資金には、生活再建支援金、義援金、これまでの預貯金を充てました。土地の広さは、以前の土地と比べるとかなり広くなりましたが、家屋は前の家とほぼ同じ広さです。平屋建て本間の和室3室、洋室1室、ダイニングキッチン、トイレの全室を、準二さんが楽に動けるようバリアフリーにリフォームし、手すりも付けました。

リフォームがすべて完了した、今年8月7日に入居できた下田さん夫婦ですが、全く知らない土地に来たわけではなく、自宅の周りには昔からの知人がたくさんいます。近所の人たちも温かく迎

え入れてくれました。

「地震はつらい出来事だったけれども、地震のおかげで人の温かさを知ることができました。避難先でも皆さんに親切にしてくださいました」(絹子さん)。

床の間には、家の購入と同時に譲り受けた「正義大道」の掛け軸が掛かっています。「前向きに生きていくことが大事」、「あきらめてはだめ」、「人は大道を歩く、小さい道に入ったら八方ふさがりになる」。ご夫婦の思いと同じです。



新しい場所で次の人生を歩み始めた二人。準二さんは、和室の雪見障子を開けて庭を眺めるのが日課となっています。庭の一角にある畑でスコップを杖代わりに野菜の栽培ができるのを楽しみにしています。一方、絹子さんは、「長年使っていたピアノを地震後売ってしまった。弾けないのが残念」と言いますが、「しばらく中断していたピース芸を、また始めたいです」と希望を語ってくれました。

仲良し夫婦のもとには、これから親戚やたくさんの友人が訪れることでしょう。